

---

## 北ドイツのバッハ・オルガン

吉田 恵 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

---

オルガン<sup>1</sup>という楽器は、非常に寿命の長い楽器である。ヨーロッパ各地の教会で、400年から500年前に作られた楽器が実際に使われている事も珍しくはない。修復が頻繁に行われること、そして楽器の状態が悪くなってもすべてを取り壊して全く新しく製作するのではなく、古い楽器を部分的に使用し、再構築してきたことが寿命を延ばした原因である。また北、中部ドイツでは、ドイツにオルガンが普及し始めた13、4世紀頃の規模の小さいオルガンに、鍵盤やストップ<sup>2</sup>、演奏補助装置を増設することが頻繁に行われた。バッハが使用したオルガンも、このような経緯によって発展してきた楽器である。

### 1. バッハ・オルガンと呼ばれる歴史的オルガン

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685-1750)が、オルガニストとして何らかの形で関わった北、中部ドイツに点在する、あるいはした、75台のオルガンを「バッハ・オルガン」と呼ぶ。そのうち、当時の姿のまま残っているのが14台、当時のパイプあるいはパイプケース、演奏台の一部を用いて修復されたものが18台で、残りは消失している。現存する32台はもちろん演奏可能であり、現在も礼拝やコンサートに使用されている。

バッハ・オルガンと呼ばれる楽器は、大きく3つに分類される。まず、バッハがオルガニストを務めた教会のオルガン、バッハが鑑定をしたオルガン、そしてバッハが修業時代あるいは演奏会で演奏したオルガンである。

#### (1) バッハがオルガニストを務めた教会のオルガン

バッハは、1704-1707年にアルンシュタットの新教会、1707-1708年にミュールハウゼンの聖ブラージュウス教会、1708-1717年にヴァイマールの宮廷礼拝堂でオルガニストを務め、ライプツィヒでは1723-1750年にトーマス教会のカントール<sup>3</sup>を務めた。

アルンシュタットの新教会でバッハが使用した楽器は、1699-1703年にヨ

ハン・フリードリヒ・ヴェンダー（1656-1729）によって製作された。ヴェンダーは1676年にミュールハウゼンの聖マリア教会のオルガン修復を行うまで、オルガン建造家として認められていなかったが、この修復以降オルガン建造家として名を馳せ、5台の「バッハ・オルガン」に関わっている。新教会のヴェンダー・オルガンは2段手鍵盤とペダル、21ストップの規模のオルガンであった。18世紀後半から19世紀にかけて、何度か修復と増築が繰り返され、1913年にはオッティンゲンのシュタインマイヤー社によって3段目の鍵盤が新たに増設された。新教会は1935年にヨハン・ゼバスティアン・バッハ教会と改名され、オルガンは1997-1999年に、再びシュタインマイヤー社によって1703年当時の姿に復元された。21ストップのうち、10ストップ分のパイプにヴェンダーのパイプが使用され、その他の部分も18世紀前半までにこのオルガンの修復に関わったオルガン建造家のパイプが利用されている。オルガンは3階の回廊の天井ぎりぎりに設置されているため、空間全体における音響的效果は余りない。しかし、バランスの取れたディスポジション<sup>4</sup>と素朴な音色を持つこのオルガンから、バッハの初期のオルガン作品の名作が生まれたことは想像に難くない。

ミュールハウゼンの聖ブラージウス教会のオルガンは、1560-1563年にヨスト・パーペによって製作され、1676年にヨスト・シェーフアーによって再構築された。その後、1689-1691年にヴェンダーが増築して2段手鍵盤とペダル、29ストップの楽器となった。ミュールハウゼンでのバッハのオルガニストとしての在任期間は、約一年間という非常に短い期間ではあったが、就任してわずか半年後に、バッハの提案によってさらに増築が行われている。それまでの北ドイツ体験で、ペダルの低音が充実したオルガンに感銘を受けたバッハは、このオルガンにもその響きを求めた。増築は引き続きヴェンダーによって行われ、3段手鍵盤とペダル、37ストップという規模の大きいオルガンに生まれ変わった。オルガン研究の父と呼ばれるヤコブ・アドルング（1699-1762）は、『オルガンの構造と奏法』（Musica Mechanica Organoedi 1768, § 177）のなかで、このオルガンをバッハの理想のオルガンの仕様として取り上げている。しかし、19世紀に入ってからには様々な再建築が行われ、外側のケースだけは残されたものの、パイプはすべて入れ替えられてしまった。現在設置され

ているオルガンは、1959年にシュッケ社によって、バッハのディスポジションを復元したものであるが、残念ながらオリジナルの部分はまったく含まれていない。

ヴァイマルの宮廷礼拝堂のオルガンは、1657年にザクセン候ヴィルヘルム四世がエアフルトのバーフェッサー教会から、ルードヴィヒ・コンペニウス（1608-1671）製作の古いオルガンを移築したものである。コンペニウス一家は、父であるハインリッヒ・コンペニウス（1565-1631）がライプツィヒのトーマス教会の小オルガンの製作、また息子ルードヴィヒがナウムブルグのバッハ・オルガンに関わったことから、バッハゆかりのオルガン建造一家として知られている。1707-1708年にはヨハン・コンラート・ヴァイスハウプトが、新しいふいごとペダルストップを増設した。1712-1714年にはバッハの提案によって、ハインリッヒ・ニコラウス・トレブス（1678-1748）がふいごの改良と新しいストップの増設を行い、2段手鍵盤とペダル、23ストップの楽器となった。ミュールハウゼンの聖ブラジウス教会に比べると規模の小さい楽器ではあるが、ふいごの改良によってバッハ好みの響きが得られていたと推測される。そのことはヴァイマル時代にバッハが作曲した秀逸なオルガン作品からも、見て取れるのではないであろうか。その後1738年までに数回の修復が行われたが、1774年の火事によって、「天の城」と呼ばれた芸術的価値の高い礼拝堂と共に消失してしまった。

ライプツィヒのトーマス教会には大小2台のオルガンが設置されていた。大オルガンの最初の記録は1384年である。1511年にはブラジウス・レーマンが全く新しいオルガンを製作し、その後繰り返された増築で2段手鍵盤とペダルという規模にまで再構築された。1598-1599年にヨハン・ランゲがストップを25ストップに増やし、1670-1671年には、クリストフ・ドナートとその息子達が3段目の手鍵盤を増設した。その後このオルガンはヨハン・シャイベ（1680-1748）の管理下におかれた。1721-1722年には広範囲にわたる再構築、バッハのカントール就任後の1730年には、オルガン内部の大掛かりな清掃、調律と整音、1747年には再び修復が行われた。シャイベは1705年からライプツィヒの大学専属オルガン建造家として、市内のすべてのオルガンの保守を担当し、ゴットフリート・ジルバーマンやザッカリス・ヒルデブラ

ントと共に、バッハとの親交を深めたオルガン建造家として知られている。このオルガンは1889年にヴィルヘルム・ザウアーによって全く新しいロマン派タイプのオルガンに建てかえられた。現在、トーマス教会に設置されている新しい「バッハ・オルガン」は、バッハの生地アイゼナハ聖ゲオルグ教会の、1707年にゲオルグ・クリストフ・シュテルツングによって製作された4段手鍵盤とペダル、58ストップのオルガンを、2000年にゲラルド・ヴェールが復元したものである。小オルガンは、燕の巣オルガン<sup>5</sup>の様式で、1489年に南の壁面に設置された。1629年から1728年の100年間で、コンペニウス、ヒルデブラント、シャイベ他、5人のオルガン建造家によって修復と増築が繰り返されたが、1740年-1741年に崩壊の危険を回避するために、シャイベによって取り壊された。2段手鍵盤とペダル、21ストップのこのオルガンは、バッハの《マニフィカト》BWV233aや《マタイ受難曲》の演奏に使用されたことが記録に残っている。

## (2) バッハが鑑定したオルガン

オルガンの鑑定とは、新しく製作、再構築されたオルガンの状態を演奏家の立場から検証し、発音、音色、整音、風量等オルガンの全ての機構について改良すべき点があれば、意見を述べることである。

バッハは、1703年以降、1746年までドイツ各地で20台のオルガンを鑑定したという記録が残されている。このうち、以下の7台のオルガンに関して、バッハの自筆の書類が残されている。すなわちそれは1708年ミュールハウゼン・聖ブラージュウス教会、1711年タウバッハ・聖ウルスラ教会、1716年ハレ・聖母教会、1716年エアフルト・アウグスティン教会、1717年ライプツィヒ・パウロ教会、1746年ショルタウ・聖ニコライ教会、1746年ナウムブルグ・ヴェンツェル教会である。この中で、現存している最大規模のオルガンは、3段手鍵盤とペダル、53ストップを持つ、ナウムブルグ・ヴェンツェル教会のオルガンである。製作者のザッカリス・ヒルデブラント(1688-1757)は、ゴットフリート・ジルバーマン(1683-1753)の弟子として知られ、このオルガンの鑑定書には、バッハと並んでジルバーマンの署名もある。ゴットフリート・ジルバーマンは、バッハともっとも深い親交を結んだオルガン建造家で、兄で

あるアンドレアス・ジルバーマンの下で修行を積み、生涯で 50 台ほどのオルガンを作った。ゴットフリートはバッハのオルガン鑑定の手法を基にしたと思われる、16 項目にわたる「オルガン鑑定の正しく、基本的な手引き」を書き残している。

バッハはオルガンの鑑定だけでなく、製作前のアドバイスをも行っていた。最晩年の 1749 年、フランクフルトのフランツィスカーナ教会の新オルガンについてはオルガン建造家ハインリッヒ・アンドレアス・コンティウスに、ハルトマンズドルフに新設するオルガンについては、オルガン建造家ドナーティに、コンセプトを提案した記録が残っている。

### (3) バッハが演奏したオルガン

バッハが自分の教会以外で、実際に演奏したとされるオルガンは、3 つに区分することが出来る。まず、オルガニスト就任試験、鑑定、演奏会の記録が残されているオルガンである。次に、旅の途中で滞在した街のオルガンである。これに関しては記録がなければ完全に推測の域を出ることは出来ないが、オルガニストの性、未知の楽器を弾きたいという強い欲求を考えると、可能性は非常に高いと思われる。最後に、音楽家としての修業時代を過ごし、その後も 2 度にわたって訪れた北ドイツのオルガンである。

教会のオルガニストになるためには、まず、オルガニスト就任試験に受かることが必要である。バッハはヴァイマル時代とケーテン時代に、他の職場を求めてオルガニスト就任試験に応募している。1 度目はハレの聖母教会で、1713 年に就任試験に合格し、任命書を受け取っていたが、待遇に関する条件が折り合わずに就任を拒否している。聖母教会のオルガンは、3 段手鍵盤とペダル、65 ストップという大規模な楽器で、1712-1716 年にクリストフ・コンティウスによって新しく製作された。バッハは、1713 年のオルガニスト就任試験の際に製作途中の状態でも演奏し、1716 年の完成後には、このオルガンを鑑定している。2 度目はハンブルグの聖ヤコビ教会だが、実際に試験演奏は行わなかった。しかし、ハンブルグ滞在中に聖カタリナ教会で行ったオルガン演奏は、聴衆を驚嘆させたと言われている。

バッハの演奏会記録としてよく取り上げられるのは、3 度にわたるドレスデ

ンへの演奏旅行である。聖ソフィア教会で1725年9月と1731年9月、フラウエン教会で1736年1月に行われた演奏会については詳細な記録が残されている。この2つの教会のオルガンは、ゴットフリート・ジルバーマンによって製作された。聖ソフィア教会のオルガンは、1718-1720年製作、2段手鍵盤とペダル、30ストップであったが、1945年に消失している。フラウエン教会のオルガンは1732-1736年製作の3段手鍵盤とペダル、43ストップの楽器であったが、第2次世界大戦の空爆で教会と共に全壊してしまった。現在のオルガンは、教会の再建に合わせて2003-2005年にケルン社により製作され、一部のディスポジションのみが再現されている。

バッハが旅の途中で立ち寄ったとされる街として、ゴータ、ベルリン、フライベルグ、ヴァルターハウゼンなどが挙げられる。なかでも、フライベルグの聖マリア大聖堂とペトリ教会のオルガンは、ジルバーマンの製作であることから、記録は無くとも演奏したことはほぼ確実だと思われる。聖マリア教会のオルガンは、1710-1714年に新設され、3段手鍵盤とペダル、44ストップで、ペトリ教会のオルガンは1734年に新設され、2段手鍵盤とペダル、31ストップであった。現在、両楽器ともほぼオリジナルの形であるといわれているが、19世紀から20世紀に行われた修復の資料が少なく不明な点が多い。

バッハの北ドイツ体験は、1700年リュースネブルグ聖ミカエル教会付属学校入学から始まる。その後1705年にはリュースベックに巨匠ブクステフーデを訪ね、1720年にはハンブルグに聖ヤコビ教会オルガニスト就任試験のために滞在した。これらの機会にバッハは、当時の北ドイツで最大規模かつ名器と呼ばれるオルガンに触れたのである。バッハのオルガニスト人生において、北ドイツ様式のオルガンに触れたことは、作品と演奏に大きな影響を与えたが、さらにバッハのオルガン鑑定にもその影響を見ることが出来る。

## 2. 北ドイツ・オルガン楽派とバッハの関わり

バッハは、1700年にリュースネブルグ聖ミカエル教会付属学校に給費奨学生として入学した。聖ミカエル教会のベネディクト会修道院は、955年頃から学校教育の中心的役割を担い、典礼歌の教育にも貢献した。後に修道院は、当時のブラウンシュヴァイク - リュースネブルグ公国のすべての地域における市や

教会の音楽監督を輩出する音楽教育機関へと発展する。市や教会の音楽監督とは、祝祭、式典、結婚式、礼拝などに使用される音楽の作曲と演奏を行い、また教会付属学校のような公的教育機関で教師を務める音楽家である。バッハが後に就任したライプツィヒ・トーマス教会のカントールがまさにこれに当たり、この時期すでにカントールとしての研鑽を積んでいたと言えよう。バッハが受けた奨学金は、才能のある合唱歌手を育てる目的で設けられたものであったため、オルガンのレッスンを受けたという記録は無いが、リューネブルグの聖ヨハネ教会のオルガニストであったゲオルグ・ベーム（1661-1733）からオルガンを学んだとされている。このことは、バッハのオルガン作品にベームの影響が見られることから、ほぼ確実であろう。1700年頃の聖ヨハネ教会のオルガンは、当時のリューネブルグで最高のオルガンであり、少年時代を過ごしたオールドルフで、兄のヨハン・クリストフ・バッハ（1671-1721）がオルガニストを務めていた聖マリア教会のオルガンよりも、格段に規模の大きいものであった。また、バッハが1702年までの間に度々ハンブルグを訪れ、聖カタリナ教会で巨匠ヨハン・アダム・ラインケン（1623-1722）のオルガン演奏を聞いたことは、息子のカール・フィリップ・エマニュエル・バッハ（1714-1788）によって伝えられている。バッハは、ラインケンの壮大なコラル幻想曲《バビロンの流れのほとりに》のタブラトチュアを所持し、研究することで、北ドイツ・オルガン楽派特有の様式であるコラル幻想曲への造詣を深めた。聖カタリナ教会のオルガンは、その当時既にペダルに32フィートのプリンシパルとポザウネという巨大なパイプを持つストップを配しており、バッハはその充実した低音の響きに強い感銘を受けた。

1705年、20歳のバッハは、ディートリッヒ・ブクステフーデ（1637-1707）を訪ねるため、休暇をとってアルンシュタットからリューベックに赴いた。休暇はもともと4週間の予定であったが、3ヶ月近く延長され、帰宅後に職務怠慢審問を受けることになってしまった。その審問でバッハが旅の目的を、「自己の芸術に関わる何がしかを得ること」と語った、という記録が残っている。バッハのオルガン作品におけるブクステフーデの影響は明らかである。当時、北、中部ドイツに広く流布していたブクステフーデのオルガン作品の手稿譜をバッハが研究したことは、このリューベック訪問以前の作品にも反映されてい

る。しかし、この訪問で直接ブクステフーデのオルガン演奏を聞いたことは、バッハのオルガン作品に大きな変化をもたらした。ペダル声部が低音を支えるだけでなく、そこに手鍵盤で演奏するようなパッセージを取り入れることで、ペダルが作品全体に果たす役割を多様化させたのである。特に、フーガのテーマにおいて、ペダルで演奏するための配慮を取り払う、すなわち、ペダルで弾きやすい音型を用いるのではなく、自由な発想でテーマを作るようになったことは、ブクステフーデのペダル奏法の名人技が与えた強い影響によるものである。

ケーテンの宮廷楽長時代の1720年、バッハはハンブルグの聖ヤコビ教会のオルガニスト就任試験に応募したが、試験は受けなかったと伝えられている。当時の聖ヤコビ教会のオルガンは、4段手鍵盤とペダル、60ストップという大規模な楽器であった。それに引き換え、ケーテンで一番大きいオルガンが、アグヌス教会の2段手鍵盤とペダル、27ストップという半分の規模であったことから、オルガン環境を鑑みれば、聖ヤコビ教会非常に魅力あるポストであった事は確かである。バッハは、試験前に、ケーテンからの要請で宮廷に戻らざるを得なかったが、バッハ自身、中部ドイツと全く環境の違うハンブルグに移住するつもりがあったかどうかということには疑問視もされている。滞在中に聖カタリナ教会で演奏した模様が、息子カール・フィリップ・エマニュエルと弟子であるヨハン・フリードリヒ・アグリコラ（1720-1774）による『故人略伝 Nekrolog』（Bach-Dokumente III）<sup>6</sup>によって伝えられている。それによれば、バッハはリュネブルグ時代から尊敬するオルガニスト、ラインケンの前で、『バビロンの流れのほとりに』を用いて、ほぼ半時間も、かつてハンブルグのオルガニストの間で行われていた伝統的な技法で即興を行った。その演奏に対して、ラインケンから、「この技法はとっくにすれたと思っていましたが、あなたの中で、なおも生きていることを知りました」という賛辞を受けたという。

### 3. 北ドイツのオルガン建造とバッハ・オルガン

後期ルネッサンス時代から初期バロック時代にかけて、北ドイツには、オランダのオルガン建造の技法が流入していた。その中心的存在は、ハンザ同盟都

市として栄えていたリューネブルグとハンブルグで多くのオルガンを建造したヘンドリック・ニーホフ（1495-1560）であった。ニーホフ自身は、オランダに近い北西ドイツ、ヴェストファーレンの出身で、アムステルダムの子ヤン・ファン・コヴェレンス（1470-1532）の下で修行した。コヴェレンスが製作した中で、アルクマールの聖ローレンス教会のオルガンは現在も演奏可能な状態であり、オリジナルの8ストップは非常に美しい音色を保っている。コヴェレンスの死後、ニーホフは独立し、オランダ全域に数多くのオルガンを設置した。中でも、1539-1543年にアムステルダムの古教会に設置した大オルガンは、後にスウェーリンク・オルガンとして知られることになった。ニーホフが北ドイツのオルガン建造の革新に与えた、最も注目すべき点は、リュックポジティブ<sup>7</sup>の設置である。立体的な音響効果のあるリュックポジティブは、オランダでは既に、1404年にユトレヒトで設置されたとの記録が残っており、ニーホフ以降、北ドイツのオルガン建造においてもしっかりと根づく事になった。この時代の北ドイツのオルガン建造家達、ヨハネス・シュテファアーニ（リューベック、1400年代中頃）、ハルメン・ステューヴェン（ハンブルグ、1500年代前半）、ヤコブ・イヴェルザンド（ハンブルグ、1537年頃没）の流れを汲むのが、シェラー一族である。シェラー家の2代目に当たるヤコブ・シェラー（?-1574）の娘婿、ディルク・ホイヤー（生没年不詳）は、1576年に、ハンブルグの聖ヤコビ教会のオルガンの増設を行った。この時、リュックポジティブと、さらに、リュックポジティブの横にペダルタワー<sup>8</sup>が初めて設置された。この様式は後にハンブルグ・プロスペクト<sup>9</sup>と呼ばれ、北ドイツ・オルガンの典型的な形状となる。16世紀に起こった、これらの衝撃的な革新は、ゴットフリード・フリッチェ（1578-1638）、フリードリヒ・シュテルヴァーゲン（?-1660頃）、アルプ・シュニットガー（1648-1719）に受け継がれ、ドイツのオルガン建造芸術の中核を担うものとなるのである。

北ドイツのバッハ・オルガンとしてまず挙げられるのは、リューネブルグの聖ヨハネ教会のオルガンである。1551-1553年にニーホフによって製作されたこのオルガンは、3段手鍵盤とペダル、27ストップ、そのうち11ストップがリュックポジティブという、リュックポジティブの響きに高い比重を置いたものであった。1576年には、ホイヤーによってペダルに16フィートが

増設された。その後、修復と増設が繰り返され、バッハが実際に接触した時のこのオルガンのディスポジションは、3段手鍵盤とペダル、40ストップで、1651-1652年のシュテルヴァーゲンの増設によるものであった。1712-1715年には、バームの希望で新しいペダルタワーと手鍵盤のストップの増設が、シュニットガーの弟子のマティアス・ドローパ（1656-1732）によって行われ、総ストップ数は47のオルガンとなった。19世紀と20世紀にも数回にわたって増設と修復行われたが、その際にシュテルヴァーゲンのパイプは消失してしまった。しかし現在も、ニーホフ、ホイヤー、ドローパのパイプが、半数以上残されている。

リューネブルグの聖ミカエル教会のオルガンの記録は、教会の北側の壁面に設置されていた製作者不詳の古いオルガンを、1538-1552年に、シェラー一族の手によって再構築されることから始まる。1551年には、リュックポジティブの増築を、1580年にはストップの増設が、ホイヤーによって行われた。1683年に、シュニットガーがこのオルガンを鑑定し、「ほとんど良い状態とは言えないが…しかし、いくらかは役に立つ」と報告している。この際、シュニットガーは、オルガン新設のための企画書を提出しているが、実現には至らなかった。1705-1707年には、ドローパによって教会の塔の下の西側の壁への移設と、新しい鍵盤の増設が行われ、3段手鍵盤とペダル、43ストップの楽器となった。この時期、トビアス・ゲッターリング（1700年代前半）によって、パイプケースに精巧な木彫刻が施された。1873年にロマン派仕様のオルガンに作り変えられた際に、パイプはほとんど入れ替えられてしまったが、ゲッターリングのパイプケースが用いられた。その後も度々、修復と再構築が行われたが、現在もその美しい外観は残されている。

リューベックの聖マリア教会には、主オルガン、小オルガン、聖歌隊伴奏用オルガンの、3台のオルガンが設置されていた。主オルガンは、小オルガンに先んじて、1400年頃に設置され、1516-1518年には、新しいオルガンに入れ替えられた、あるいは大掛かりな再構築が行われたとされているが、製作者は不明である。1560-1561年、シェラーによって、11ストップを配するブルストポジティブ<sup>10</sup>が増設された。1637-1641年には、シュテルヴァーゲンによって3段手鍵盤とペダル、54ストップへの大規模な増築が行われた。1683

年には、ブクステフーデの希望であった3台のオルガンの同時演奏をかなえるために、リュウベックのオルガン建造家ミヒャエル・ブリーゲル（生没年不詳）が31日半かけて、2台のオルガンのリード管以外のすべてのストップの調律を行った。しかし、調整がうまくいかず、結局、3台の同時演奏は行えなかったことが、ブクステフーデと親交のあったアンドレアス・ヴェルクマイスター（1645-1706）の著作『音楽の調和』（*Harmonologia musica*1702: 20）に記されている。1733-1735年にはさらにメカニックの改良が行われ、1851-1854年には、ヨハン・フリードリッヒ・シュルツェ（1793-1858）によって、4段手鍵盤とペダル、80ストップの完全に新しいオルガンに入れ替えられたが、1942年、第2次世界大戦による爆撃で、他の2台のオルガンと共に消失した。

小オルガンは、1475-1477年、ヨハネス・シュテファアーニによって、北側の小礼拝堂に設置された。その壁面には、ベルント・ノトケ（1435-1508/9）による死の舞踏の彫刻が施されていたため、このオルガンは死の舞踏オルガン（*Totentanzorgel*）と呼ばれるようになった。設置当初は一段手鍵盤とペダルという規模であったが、1557-1558年に、シェラーによってリュックポジティブが、1621-1622年に、シュニットガーの弟子のヘンニング・クレーガー（生没年不詳）によってプルストヴェルク<sup>11</sup>とペダルのストップが増設され、もはや小オルガンとは呼べない規模のオルガンとなった。1653-1655年には、シュテルヴァーゲンによってふいごが改善され、主オルガンに負けない響きを持つようになったと思われる。バッハが訪れた当時、3段手鍵盤とペダル、40ストップであったこのオルガンは、1845-1846年の再構築で34ストップの規模にまで縮小された。しかし、1937年のケンパー社による修復でも、部分的にしか手を加えられなかったとされているため、おそらく、消失するまではオリジナルの部分が多く残されていたと思われる。そこで、教会が再建された後に1937年のディスプレイの再現が試みられたが、復元に必要なデータが揃わなかったために途中で断念され、1986年にフューラー社によって4段手鍵盤とペダル、56ストップのオルガンが新設された。

1705年当時のこの2台のオルガンのディスプレイの中で、特筆すべきは充実したペダルのストップである。それぞれのオルガンは、50ストップと54ストップを持ち、そのうちの15ストップがペダルに配され、32フィート

の低音から2フィートの高音、重厚な響きを持つ音色から柔らかい表情を持つ響き音色まで、手鍵盤に勝るとも劣らない音色の種類を有していた。このような楽器を日常的に用いれば、ブクステフーデのオルガン作品に見られるような、ペダルが手鍵盤と対等な役割を果たす作品が生まれるのも当然の帰結であると言えよう。

ハンブルグの聖ヤコビ教会と聖カタリナ教会のオルガンは、典型的なハンブルグ・プロスペクトを持つオルガンである。聖ヤコビ教会のオルガンは、1512-1516年にイヴェルザンドとステューベンによって製作され、その後およそ80年に亘り、シェラー一族に管理された。1655年に、フリッチェによって修復されたが、1689-1693年には、シュニットガーが既存の25ストップを用いて、新しいオルガンを製作した。その後は、修復と再構築が繰り返され、第2次世界大戦中の1942年には、空襲に備えて、パイプとふいごを疎開させた。教会堂は、1944年、爆撃によって倒壊し、1951-1959年に再建された。教会堂の再建前の1948-1950年には、南側の身廊の地面の上に、暫定的なオルガンの再建がケンパー社によって行われた。1961年、新しい教会堂の中廊のギャラリーの上に、ケンパー社によって変更が加えられたオルガンが再構築され、シュニットガーの要素はほとんど消えてしまっていた。しかし、1989-1993年には、ユルゲン・アーレント（1930-）の緻密な修復、復元によって、1693年の姿に戻された。このオルガンの、細部にまで亘る徹底的な復元は、オリジナル楽器と肩を並べることが出来るほどの完成度の高さであり、歴史に残る修復事業であるといえよう。4段手鍵盤とペダル、60ストップのうち、14ストップがペダルに配されており、どの手鍵盤よりもペダルのストップ数が多いのは、聖カタリナ教会と同じである。

聖カタリナ教会のオルガンは、以前からあった古いオルガンを1520年にマルテン・デ・マーレ（?-1612）が再構築し、その後、繰り返された増築によって1551年にはすでに、3段手鍵盤とペダル、43ストップという、当時としては最大規模の楽器となった。1551-1552年には、ニーホフによってリュックポジティブが増設され、その後はシェラー一族を経て、フリッチェによって管理、調律が行われ、さらに1636年には、ブルストヴェルクに7つのストップが増設された。バッハを感嘆させたペダルのプリンツィパルとポザ

ウネの 32 フィートは、シュテルヴァーゲンが 1644 - 1647 年にかけて、ヨハン・フリードリッヒ・ベッサー（1655 頃 -1693）とヨアヒム・リヒボーン（?-1684）が 1644-1675 年にかけて増設したものである。その後、20 世紀に至るまで、何度か修復と再構築が繰り返された。第 2 次世界大戦の際、まず、1016 本のパイプを疎開させたが、残りのパイプと演奏台、パイプケース、ふいごは、1943 年の空襲で、教会堂と共に消失してしまった。現在は、2013 年 9 月に完成したフレントロップ社製のオルガンが、設置されている。1720 年と同じ仕様で、ほぼ同じディスポジション、4 段手鍵盤とペダル、61 ストップで、520 本のオリジナルパイプが使われている。オリジナルの仕様は、4 段手鍵盤とペダル、57 ストップを持ち、そのうちペダルのストップは 16 ストップであった。このオルガンがバッハに強烈な印象を与え、生涯を通してその記憶を呼び起こしていたことは、弟子のアグリコラによって伝えられ、前述のアドルングの著書にも次のように記されている。

ライブツィヒの楽長であった故バッハ氏は、ハンブルグの聖カタリナ教会のオルガンにおいて、ペダルの 32 フィートのプリンツィパルとポザウネの、一番低い C のはっきりとした完全な発音は、他のパイプと同様にすばらしいと断言した。彼は、特にこのプリンツィパルについて、大きさ、質共に比類なきものであると言うにふさわしい、と語った。（補遺 10 章）

バッハのオルガン鑑定に関して残された資料からは、バッハがそのオルガンを鑑定するだけでなく、修復や再構築によって、自身の理想のオルガンに近づけるためのアドバイスを 행っていたことが伺える。その結果、北ドイツと中部ドイツという、2 つのオルガン建造の伝統が交差することになった。また、バッハのオルガン作品の多くはヴァイマル時代に作曲されたが、ヴァイマルの宮廷礼拝堂でバッハが使用したオルガンは、バッハ・オルガンと呼ばれるものの中でも規模の小さい楽器であった。現に、ヴァイマル時代に、主君からの要請で編曲したイタリアの協奏曲の数々は、オリジナルの音域をオルガンの音域に合わせて書き直している。しかし、同時期に作曲された《パッサカリア ハ短調》BWV582 や《トッカータとフーガ ヘ長調》BWV540 といった大

規模な作品には、当時のオルガンには備わっていない音域が出現する。また、『オルガン小曲集』や『17のコラール集ヴァイマル稿』からは、コラールに対する華美とも言えるほどの複雑な伴奏にコラール旋律を埋もれさせるのではなく、さらに旋律として浮き立たせたいという願望が見てとれる。これをかなえるためには、規模が大きく、なおかつバランスの取れたディスポジションが必要となる。このことは、バロック時代までの教会オルガニスト達の残した作品が、自身の使用していた楽器を前提としているのに比べて、バッハの壮大な作品の数々が、その枠を大きく超えていることを示している。そして、バッハが求めるオルガンが、歳を重ねるごとに変化していったことは、晩年のオルガン作品である《カノン風変奏曲〈高き御空よりわれは来たり〉BWV769》や『クラヴィア練習曲集第3巻』から推察できる。そこには、緻密で複雑な対位法、旋律やカデンツに隠されたBACHの文字や多様な装飾音を明瞭に響かせる、様々な音色を持つ楽器像が浮かんでくる。オルガニストが演奏をする上で最も重要な技術は、レジストレーション<sup>12</sup>である。その作品にふさわしいレジストレーションを行うためには、作品が生み出されたオリジナルの楽器を理解し、響きを体感することが必要である。

では、バッハのオルガン作品を演奏するに一番ふさわしいオルガンはどれかと問われても、現存する楽器の中から断定的に選ぶことは不可能であろう。しかし、バッハのオルガン作品の中には、バッハが求めた理想のオルガン像が確かに存在するのである。それを様々なオルガンに当て嵌めていっても、断片のみしか適わないことは自明の理である。それでもなお、バッハを演奏する上で、その試みを行うことは、計り知れないほどの深い意義を持つことであると確信している。

[注]

- <sup>1</sup> 本稿で用いるオルガンに関する専門用語は、現在の日本での慣例的な使用法に従い、英語とドイツ語を混在させている。
- <sup>2</sup> 音色を選ぶ装置
- <sup>3</sup> 教会付属学校教師、教会音楽監督
- <sup>4</sup> 音色の種類と配置
- <sup>5</sup> 教会の壁に燕の巣のように取り付けられているオルガン
- <sup>6</sup> 角倉一郎監修 1997 『バッハ叢書』第10巻資料集 白水社（復刊）
- <sup>7</sup> 演奏者の背面部に据えられるパイプケース
- <sup>8</sup> ペダルのパイプケース
- <sup>9</sup> 独語：全景図
- <sup>10</sup> 3段目の手鍵盤
- <sup>11</sup> 3段目の手鍵盤
- <sup>12</sup> 作品にあった音色を選んで組み合わせること

参考文献

- ゲック、マルティン 2001 『ヨハン・ゼバスティアン・バッハ』東京書籍
- Beckmann, Klaus. 2009. *Die Norddeutsche Schule Teil 2. Blütezeit und Verfall: 1620-1755*. Mainz: Schott Musik.
- Dittrich, Marie-Agnes. 1990. *Musikstädte der Welt Hamburg*. Laaber-Verlag.
- Jacob, Friedrich. 1974. *Die Orgel*. Bern; Stuttgart: Hallwag Verlag.
- Wolff, Christoph and Markus Zepf. 2006. *Die Orgeln Johann Sebastian Bachs*. Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt.